2023 年秋　谷川連峰・茂倉岳＆奥只見・南会津の山々

（報告）赤澤　東洋

１．茂倉岳 1978m　土樽駅周回コース

◎期日：2023 年 10 月 12 日（木）～13 日（金）　　◎同行者：ナシ

コロナで揺れた３年半、海外遠征はもとより仲間との国内山行も自粛せざるを得なかったが、個人的には月２回ペースを目標に単独又は家人と２人で数多ある登り残した山や行きそびれた山に行き空白を埋めることが出来たし、時期やコースを変え何度も訪ねている谷川連峰には、これがもう最後かもの思いをこめて再訪し、過去を振り返りながらしみじみと曾遊の地を味わう事が出来たのでコロナへの恨みは少し薄められていたかと思う。

谷川岳に最初に登ったのは 1959（昭和 34）年、高校２年生の秋、山岳部集中登山の偵察山行 C 班に潜り込ませてもらい巌剛新道からトマ・オキの耳に達し、下山は天神尾根から谷川温泉を経由し水上駅に下った。朝５時半土合駅を出て水上駅まで９時間半、３時半の列車に充分間に合ったのだから若かった。

住いの関係で谷川岳は行きやすく、48 歳時にスキー仲間に槍・穂のキレット越えを誘われた時、足慣らしに辿ったのが単独で肩の小屋から大障子避難小屋⇒平標山⇒土樽駅と縦走、1990 年６月の事で翌７月の槍・穂も３日間天候に恵まれルンルン気分で難路を歩き通し、これが自信となり本格的に登山を再開する事になった。以来谷川連峰は我がフィールドとなり、ガイドブック「谷川岳・上越の山」に紹介されているルートの全て踏破を目論み、トマの耳には 50 数回、白毛門、平標山、三国山、稲包山、小出俣山等に各 10～15 回足跡を残し、今は歩ける内に思い出多いルートをもう一度歩いてみようと実践に至っている。

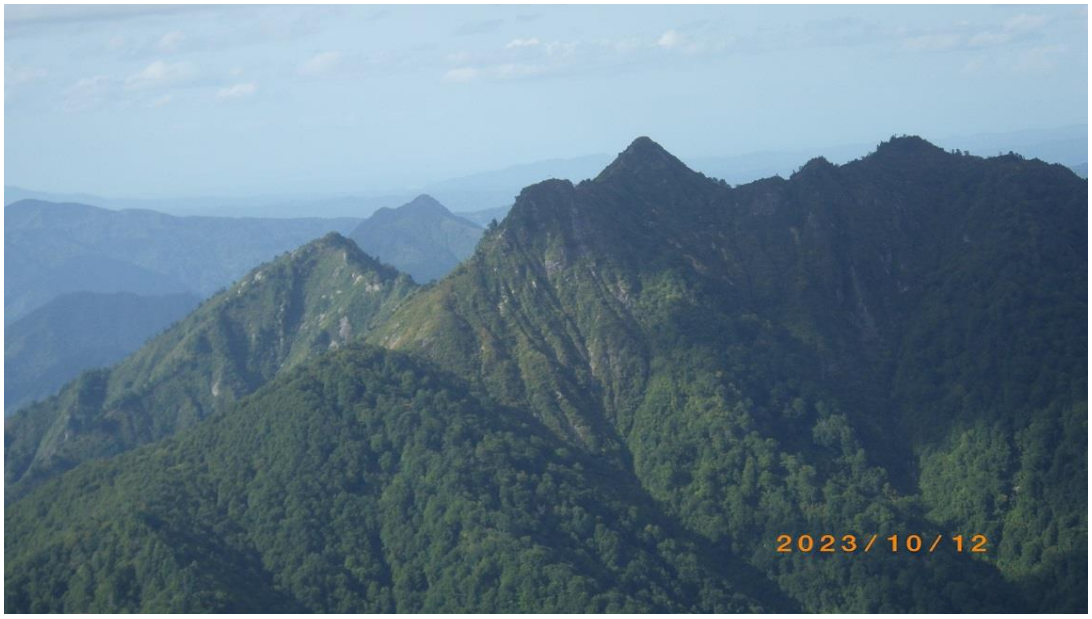
今回は昨年秋に改修工事を済ませ新装なった茂倉岳避難小屋に泊まるのを目的に土樽駅を起点とし 1955（昭和 30）年谷川岳の名物男ヒゲの大将高波吾策氏（1911～1971）によって切り開かれた茂倉新道から茂倉岳、蓬峠を経て土樽に戻るという周回コースに挑む。

本ルートを最初に辿ったのは 1993 年５月初め逆コースで西黒尾根から谷川岳に登り茂倉岳を経て土樽へ下った時で 10 時間の行程、まだ 50 歳元気だった。上りに使った１回目は 2001 年 11 月、土樽、茂倉岳、谷川岳と辿り最後は天神峠手前の田尻尾根を下って土合に出たが、この時も 10 時間で歩き通したので、我がイメージでの本コースは日帰り出来る山であり途中で泊まった事がなく、初めて泊まったのが５年前の 2018 年５月、避難小屋迄だけで６時間半もかかったのが不本意で今回は何とか短縮し６時間以内を目指す。

黒檜の密生する檜廊下

髙波吾策氏存命中は利用客も多かった土樽駅、谷川岳の裏玄関と云われたものだが降りたのは私だけと淋しい限り、駅正面に屏風のように聳える荒沢山、足拍子岳の急峻さに改めてよくぞあんな藪を漕いだものと若き日の山行が眩しい。上空は雲が多く残念ながら茂倉岳の頂上はガスに覆われているが何とか天気は持ちそうだ。駅前の投函ポストに登山届を投げ込み９時丁度歩き出す。駅の標高が約 600 ㍍、避難小屋まで標高差 1280 ㍍は老兵の身にかなりキツイのは覚悟の上だったのだが。関越自動車道入り口付近で工事中らしく時々トラックが行違う中登山口に到着、駅から 40 分もかかっている。22 年前が 30 分、5 年前が 35 分だったからなんか嫌な予感。関越自動車道のトンネル工事で掘り出された膨大な量の土捨て場だったという登山口は前日の雨で大きな水溜まりが出来ており、取付いた尾根は急登で黄土色した粘土が濡れていて滑り易く「あっちゃー、こんなに急だったっけ」と泣きが入る。しょっぱなからこれだもの、戦意喪失で意気があがらずもうノロノロと歩むだけ、時間はドンドン遅れていき。さらに尾根が狭くなり通称「檜廊下」と呼ばれる黒檜の原生林帯に入り込むと張り出した木の根や倒木に遮られ歩き難い事この上なしとなり一気に疲労困憊、ハーハー、ゼイゼイと 10 歩歩んでは膝に手を付き息継ぎ 30 秒とヘロヘロになる。

22 年前は密生する黒檜の中ひょいひょいと跨ぎ、潜り軽く乗っ越していた箇所、今や足が上がらず「こんな筈じゃあなかった！」と天を仰ぐ。



矢場の頭より足拍子岳奥の尖峰は飯士山

結局、一つの目安となる矢場の頭 1490 ㍍に着いたのが 14 時 15 分、土樽駅から 5 時間 15 分はいくらなんでもかかり過ぎだ。22 年前は３時間 20 分、５年前でも３時間 55 分だったのだから遅すぎる。標識には茂倉岳まで２時間と表示されていたが、今の体調では倍くらいかかりそう、ともかく行ける所まで行ってビバークするしかないと覚悟を決めた。ゴジラの背のようなギザギザした万太郎山の頂上部はこちら側からしか見る事が出来ないので楽しみにしていたのだが、そこだけガスに覆われて見えないのが残念ながら、振り返れば屹立する足拍子岳が堂々と聳え、その先に飯士山の尖がりも見え少しだけ気がやすらぐ。

矢場の頭からは見晴らしの利く草原と灌木の尾根道となり歩き易くなり、ここで谷川岳からという中年２人組と出会った。茂倉避難小屋には宿泊者が数名いたと云う。その後も調子はあがらず以前は川棚の頭と称した 1683 ㍍のピークでギブアップ、万太郎や茂倉の頂上はガスっているが雨は無いと判断しここでビバークする事にした。矢場の頭からここまで 1 時間半もかかってしまい、土樽駅からは 6 時間 50 分、不本意だった 5 年前でも 5 時間 15 分だったのでこれではあまりにもひど過ぎる。情けない。ガスの切れ間に避難小屋がハッキリ見えるのだが、この調子では２時間近くかかりそうなのでキッパリと諦めた。周囲には

高い木がないのでツェルトは張れず青シートと銀マットを敷き寝袋広げてツェルトは上から被るだけ、担ぎ上げた缶ビール２本と日本酒１合を呑んでいるとあっという間に上から降りてくる夜の帷に包まれた。

疲労とビールのせいですぐに眠れたが寒くなり11 時過ぎに目を覚ましツェルトから顔を出すといつの間にか頂上のガスは消え、上空にオリオンの三ツ星とシリウスが大きく瞬いている。久し振りに目にしたシリウス、明日は好い事ありそうだ。ありったけの衣類を着込み寝袋に潜り込んだが、今度は傾斜地が気になり背中が痛み寝心地悪くてなかなか寝付けなくなってしまう。ツェルトはもう夜露でびっしょりだ。

ビバーク地より関越道・土樽方面

２日目、夜明けが待ちきれず３時前に起床、直ちにパッキングしヘッドライトを点けて茂倉岳に向かう。群生するチシマザザの夜露でびっしょりとなり避難小屋まで１時間20分､小屋は何人か泊っている筈だが、まだ寝静まっている。改修後の新しい小屋の様子を見たかったが暗闇の中では輪郭もはっきりせず中を覗くのは躊躇われすぐに出発、シリウスの御利益は無くこの頃から霧雨となり茂倉岳頂上は小糠雨の有様、昨日の疲労が抜けずテレテレと蓬峠を経て土樽駅に向かい途中電車の時間調整の為高波吾策碑前のベンチで昼食タイムをとり 14 時丁度土樽駅に下山した。

暗闇を彩るウラジロナナカマド

霧雨に震える茂倉岳頂上

急速に天気回復・歩いてきた山を振り返る左武能岳

土樽駅ホームより仰ぐ茂倉岳（中央）
川棚の頭（中央右の小ピーク）　矢場の頭（右）

《考察》悔いの残る山行となってしまった。５ 年前の時間短縮なんてよく言うよ！で、短縮どころか大幅増は笑止千万、老化にはもっと早く気付くべきだったのだ。次回にリベンジなんてもう云えず、厳しき現実つきつけられて潔く老兵は消え去るばかりと反省しきりの 81 歳というところである。

《コースタイム》

1 日目：土樽駅 9:00⇒9:40 登山口 9:45⇒14:15 矢場の頭 14:20⇒15:45 川棚の頭ビバーク

2 日目：川棚の頭 3:25⇒4:45 茂倉岳避難小屋 4:50⇒5:20 茂倉岳 5:25⇒8:05 武能岳 8:10⇒
9:15 蓬峠 9:20⇒12:50 高波吾策碑 13:40⇒14:00 土樽駅

2．南会津・大博多山 1315m

◎期日　：　2023 年 10 月 23 日（月）　　◎同行者：　ナシ

大博多山は「だいはだやま」と読む。ブナ原生林が魅力と聞いていたので寄ってみる。我が立ち位置は反薩長，親会津、これは父親が岩手県南部の出身で旧伊達藩、戊辰戦争では苦汁をなめた側だった影響である。で、会津の山には親しさ感じそこそこ登ってきたが今回は登りそびれていた 3 山を巡る。

国道 401 号線から林道青柳線のガタガタ道を4㎞程辿り登山口に着く。先行車は会津ナンバーの軽トラが 1 台。いきなりの急登で、垂れ下がるトラロープに助けられる。ロープは最後まで続き、全体合計すれば数十本設置されていた。途中長靴履いて、腰には頑丈な鉈をぶら下げた地元の親父さんとすれ違う。キノコ採りらしい。ガイド本には頂上の展望が魅力とあるが、東側に双耳峰の二岐山や大佐飛山が見えるものの、北西方面は尾瀬や只見の山々を期待していたが樹林に遮られなにも見えず期待外れであった。

大博多山登山口

大博多山頂上

大博多山頂上より二岐山（左）大佐飛山（右）

蒲生岳頂上　奥は浅草岳

《コースタイム》上り　2 時間 40 分　　下り　1 時間 40 分

◎　下山後只見へ出て「只見いこいの里キャンプ場」に行くとパトカーが 1 台停まっていて警官がうろついている。何事かと思ったら熊が出て警戒しているとの由、テント泊を予約していたのだが危険なのでバンガローに泊ってくれと言われる。思わぬ出費となりこれも熊の被害かと苦笑するばかり、それにしても今年の熊は異常だ。

３．只見４名山・要害山 705m　＆　蒲生岳 828m

◎期日　：　2023 年 10 月 24 日（火）　　◎同行者：　ナシ

2011 年７月の新潟・福島集中豪雨で鉄橋流出し不通になっていた只見～会津川口間が 2022 年 10 月 11 年ぶりに復旧、地元ではローカル線再生の為いかに観光客を呼び寄せるかが大きな課題でその一環とし「只見４名山」を売り出し中である。知る人ぞ知る名山揃いと自画自賛する内訳は浅草岳 1585m、会津朝日岳 1624m、要害山 705m、蒲生岳 828m で今回は未踏の要害山と蒲生岳をねらう。

（１）　要害山：熊出没情報に躊躇いながら只見駅裏の滝神社から一服尾根に取付く。山麓はまずまずだが標高 500 ㍍付近から上は深いガスの中にあり、いきなり傾斜 40 度以上ありそうな急登でここでも垂れ下がるトラロープに助けられる。距離は短いがハナからの急登はこの辺の山の特徴なのだろう。誰にも会わず中腹から上は濃霧で何も見えない頂上は唯登ってきましたというピークハントにのみ意味があるだけだったかと自嘲。復路は南尾根登山口へ下り只見駅前に戻った.。

《コースタイム》只見駅前 6:25⇒7:40 頂上 7:50⇒（南尾根）⇒8:45 只見駅

山麓より要害山　中央右が一服尾根

（2） 蒲生岳：もう 20 年以上前の事、某山倶楽部の山行で只見を訪ねた際、只見から国道 252 号線を会津若松方面へ向かう車の中で A 氏が「あの山が会津のマッターホルン蒲生岳、頂上直下は凄い岩場」と説明してくれたが、モンブランをガイドレスで単独行してきたばかりだった私は千㍍以下の山なんて興味なし、高尾山も筑波山も登った事はないとほざく鼻持ちならない嫌味な奴だった。

登山口駐車場より蒲生岳.

要害山を下り只見駅前の観光案内所で大きなお握りを買い会津蒲生駅へ向かう。登山道は 2 本あるが距離の短い久保コースの往復としたが、ここも歩き始めてすぐに急登となりここでもトラロープに助けられる。露岩帯を過ぎゴヨウマツの尾根で男性 2 人組に追いつかれた。頂上直下の岩場で左「西側岩壁」右「鼻毛通し」の分岐となり右へ向かったが長いトラバースがありこれが結構ヤバかった。クライミングをガンガンやっていた 20 年前なら何という事もない個所に違いないが、今はもう思うように足はあがらずバランス悪くもたもたするばかり、800 ㍍悔るなかれで、昔バカにしていた事を反省する。

次から次へ続く急登をロープにすがって喘ぎ喘ぎ登り詰めた頂上には先行した 2 人組が寛いでいた。天気はすっかり良くなり山麓の只見川の対岸に正面柴倉山 871m、左手に鷲が倉山 918m が大きく、昨日登った大博多山を探したがこれは同定できず、浅草岳には一部新雪が残っていた。上り 2 時間 20 分かかったが、ガイドブックの 1 時間 25 分は疑義ありで信じがたい。

《コースタイム》登山口 9:20⇒11:40 蒲生岳頂上 12:00⇒13：50 登山口

◎大博多山、要害山、蒲生岳と 3 山登った感想は、もう一度登りたいかと問われれば「否」と云うしかない。急登の連続はロートル向けではなく 1 回登ればもういい、その時間が有ったら他を探しましょうとなる。